

「Surface」シリーズ vol.2 ～作品の背景にあるもの～

池田 晶一

日本福祉大学 情報社会科学部

"Surface" series vol.2 ～ Thought in a background of works ～

Shoichi Ikeda

Faculty of Social and Information Sciences, Nihon Fukushi University

Keywords: 現代造形, 工芸, セラミック, 色彩, surface

1. はじめに

「surface」シリーズについては、日本福祉大学情報社会科学論集 第6巻に述べているところであるが、今回は2002.11に開催した「個展」(ギャラリー プント・企画展/岡山市)及び、2003.8に開催した「-工芸からのアプローチ- 現代造形7人展 vol.2」(松坂屋本店南館 美術画廊・企画展/名古屋市)の出品作品から、作品の解説・制作に関する考え等を整理しまとめておきたい。

2. 制作コンセプトとテーマから見る作品

まず、作品の中心的素材はセラミックス(焼き物)である。いわゆる土という素材を使い造形物を生み出している。

私が作品を形にしていく上で、その背景には二つの視点がある。一つは、私の内面性から成る概念「私の中の日本・私の中の京都」である。もう一つは形や色がもたらす視覚的効果から成るテーマ「造形における形とビジュアル的効果(形がもたらす光と影・色彩と光のコントラスト)」である。

この二つの視点から作品について述べてゆく。

2.1 私の中の日本・私の中の京都

京都には日本の古くからの文化の蓄積が存在してい

る。伝統芸術にのみならず、町並みや日常の生活の中にも様々な場面でこれらの匂いを感じることができる。

私は、京都の土地で生まれ育った。私の幼少の記憶をたどってみると、京都の中心に位置する細い路地の中の町屋の風景がある。夏の暑い盛りが近づくと、祇園祭の山鉦が各町内に立並び、祇園囃子の響きが聞こえてくる。また、祭りの「雅」で気品に満ちた姿や、厳かに進む様は、十数年間京都を離れ生活していても、いまだに私の記憶の中に蘇り、鮮明にその気配や匂いまでもが感じられる。

「雅」という言葉は京都を表現する上でよく使われる言葉である。私は「雅」という言葉を、装うことのあり様の一つだと捉えている。装飾的ではあるが、その中に気品と奥行きを備えたイメージがある。ケバケバしいものではなく、厳かに存在感を有するものとして私の中にイメージされる。これらは私の作品の色合いや全体のイメージに大きく関わりを持つ。

また京都の風景に関して、町並からは格子の窓や扉、高台から望むと基盤の目に配された道路や建物、そして規則正しく繰り返される瓦の波が見える。幾何学的なイメージの中に、均整の取れた姿がそこに見えてくる。

私の制作する造形の上で、これまで幾何学的なイメー

ジを、意識するかしないかの所で扱っていたように感じる。形状の上での幾何学的形態、また同じ形状を複数構成する際にも、幾何学的な方法を用いて展開している。改めて見ると、それは私の記憶の中にある京都の風景と心地よく重なり合う。



〈写真1〉



〈写真2〉

形状の上で現れるネガとポジ、凹凸の関係は「陰と陽」「晴(ハレ)と曇(ケ)」「本音と建前」といった言葉の対比に照らし合わせることも出来る。

その上で「相反するものの同居性」「相反するものの同意性」というものを、造形の上でも思想の上でも考えているのだが、例えば「愛するが故の憎しみ」という表現がある。「愛するがゆえに愛する」といったそのままの表現もある。それを考えると「愛」と「憎しみ」は単に相反するものではなく同時に存在し、その基にある感情の表面に出る形が違うだけのように考えられる。「愛」と「憎しみ」は同居しその奥にある意味には同意性がある。

造形の上で見てゆくと、作品の表面の細かな凹凸に光が当たり陰影を作り出している。この細かな陰影は微細



〈写真3〉



〈写真4〉

なグラデーションを伴い、日向と日陰の境目を認識することは難しい。いわば、日向と日陰は面の上で同居し、それをもたらしている形状においての共通部分(同意性)が存在する。

「相反するものの同居性」「相反するものの同意性」、これらのテーマは私が日本人である(日本人だけのテーマではないかもしれないが…)ということと、その幼少の記憶から刷り込まれてきたものとしてみると、私なりに納得がゆくのである。

私がこれまでに体験してきた背景は、作品を創造する上で重要な意味を持っている。また私にとって、これらを意識的に捉えることの心地良さというものが私の中にある。それはこれらを考えること、その中に私の意識があること自体が、自然なあり方だからかもしれない。

日本人である私とは何か?京都に生まれ育った私にとって日本人としての文化とはいかなる意味を持っているのか?これらが私が私であるが故に探求すべきテーマであると現在強く感じ入るのである。

2.2 造形における形とビジュアル的効果

(形がもたらす光と影・色彩と光のコントラスト)

二つ目のテーマは「造形上のネガ・ポジと、光と影がもたらすコントラスト」。そして「色彩によるコントラストと色彩に光の作用が加わり目に見える印象」である。今回、紹介している作品においては、二つのバージョンに整理することとした。一つは「light & shadow version」である。もう一つは、「color version」である。それぞれについてまとめてゆく。

「light & shadow version」

「light & shadow version」の作品は、大きなフォルムの上でネガとポジの関係を持つ。そしてそれぞれの色彩は、光を感じさせる真珠ラスターまたはクリームラスター系の釉薬を用いたものと、闇をイメージする明度が低く金属的光沢を持つ金彩釉のものである。

作品の表面には細かな凹凸が波文様を構成し、それぞれの二つの釉薬の表面に光と影を生み出す。「光の中の光と影」「闇の中の光と影」相反するものが同居しながら不確かに、しかし確実にそこに存在する。

これらは、いつも対比を意味する上で同時に表現している。

先に述べた、私の中の日本、また京都の意識に通じるものでもある。二つの色合いについても「雅」という言葉を意識の中に置きながら制作を進めている。

「light & shadow version」は、造形的な意味と内面性から来る意味の両面において、「ネガとポジ」を私なりに取り扱っているのである。

「color version」

「color version」の作品は、技法の上で以前から試行している方法を新たに発展させた。それは一つの作品の表面の上で異なる二つの色を同居させ、視覚の上で独特の効果を狙うものである。今回は、色の効果がより引き立つように狙いを絞り、以下のように進めた。

技術的には、2色の異なる化粧泥（色顔料を調合された泥状の粘土）を、細かな凹凸のついた表面に別々の角度からスプレーガンで塗布し、異なった角度から見たときに、見える色彩が変化するというものである。

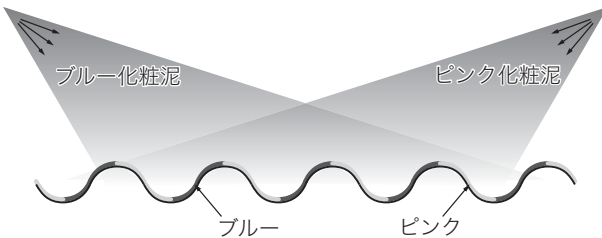


図1

このように色を塗布することで表面の波模様と凹凸の上に非常にデリケートなグラデーションを施すことが出来る。また、素材が土ということもあり、幾らかの色の幅も生じる。これらが色にやわらかさと深みを与えるのである。

また、このように彩色を施した作品の表面は、当てられた光の影響で面白い効果が得られることが、制作の過程で分ってきた。それは、図2で表したように、作品に

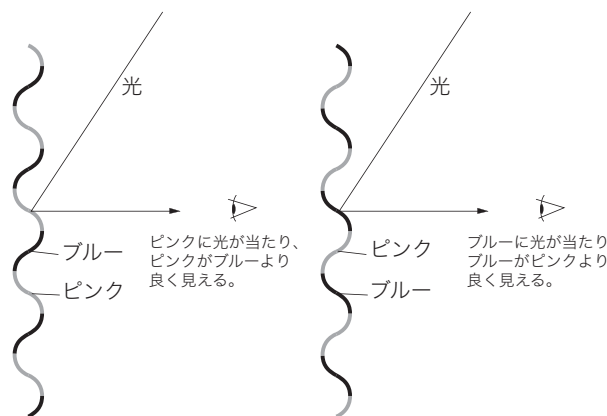


図2

あたる光の角度により見えてくる色合いが変化するというものである。作品の表面に対して直角の方向から光が当たり、面の正面方向から見た場合、2色の色合いは同等に表れるが、図2のように作品の面が垂直にある場合、上方から当たる光によって目に届く色の強さに違いが生じる。これは、表面の凹凸に由来するものであるが凹凸の光の当たる部分と影の部分のコントラストによって生じる。



〈写真5〉

写真5は実際の作品であるが、3つの三角柱は、それぞれ同じ色合いのものである。両端と中央のものは180°上下が逆になっている。色合いに変化が生じ、目に見えるパターンも違うものに映ることが認識できる。色を塗り分けて生まれる表現とは異なり、影の中にも色が存在する。それに加え細かな凹凸の模様は波打ちながら表面を覆っている。

また、波模様の中に幾何学図形のパターンを配している。微妙な角度の変化と色彩、そして陰影が相まって独特のイリュージョン効果を生み出すことが出来た。

色のコントラスト・光の陰影によるコントラスト、これらによるビジュアル効果については、今後発展的に実験を行ってゆきたい。

3. まとめ

ここまで作品について内面的な視点と、陰影や色彩に関するビジュアル的な視点に、技術的な方法を交えながら述べてきた。これらに関しては、まだまだ私なりの探

求は続いてゆく。

内面的な探求に関しては、私なりの思想や哲学的な見地から今後もその意味を深めながら進めてゆくことになるだろう。今回扱った私にとっての日本や、生まれ育った京都に対する考えは、今の私にとっての関心の本流であるが、未来においてそれが本流であるのか支流なのかは、未だ分かり得無いことでもある。

陰影や色彩に関するビジュアル的な視点に関しては、科学的な視点からも探求して行きたい事柄である。色や光の陰影をどのようにコントロールすることができるかは、作品をどのように見せるかという意味においても重要なテーマである。実際の作品制作と絡めながら進めて行きたいと思う。

4. 謝辞

文末ではあるが、ガレリア プント（岡山市）・松坂屋本店南館 美術画廊（名古屋市）において、今回の作品発表の機会が与えられたことに感謝の意を表しておく。

5. 展覧会・作品データ

「個展」 2002. 11. 15～28

(ギャラリー プント・企画展/岡山市)

- ・ The light caught on the surface・ The light reflected by the surface <表面が放つ光・表面が受ける光>(各 w:約900×h:約900mm)
- ・ 影の柱 (w:330×h:580×d:55 mm)
- ・ 光の柱 (w:330×h:580×d:55 mm)
- ・ square pillar (shade) (w:330×h:580×d:55 mm)
- ・ square pillar (light) (w:330×h:580×d:55 mm)
- ・ triangular pilla (light) (w:85×h:600×d:93 mm)
- ・ triangular pillar (shade) (w:85×h:600×d:93 mm)
- ・ cool <blue & red> (w:1005×d:1005mm)
- ・ white <light & shade> (w:1005×d:1005 mm)
- ・ warm <red & yellow> (w:1005×d:1005 mm)

注) (cool・white・warm の3作品) * 「-工芸からのアプローチ- 現代造形7人展」2001出品作品につき写真なし

「-工芸からのアプローチ- 現代造形7人展 vol.2」

2003. 8. 13～18

(松坂屋本店南館 美術画廊・企画展/名古屋市)

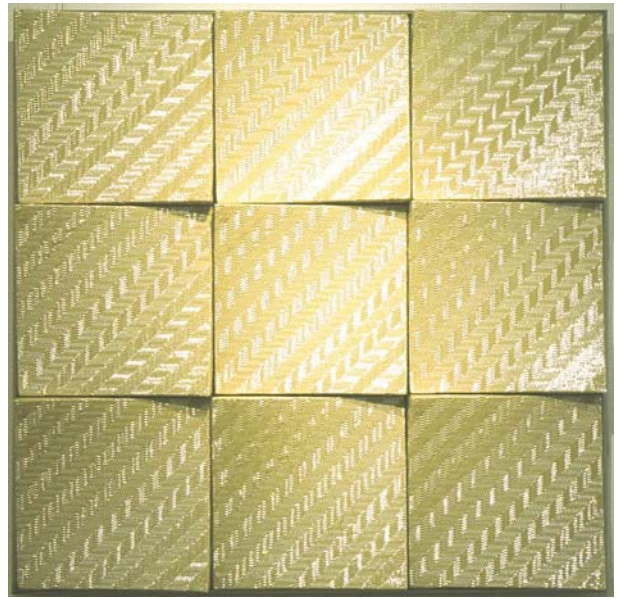
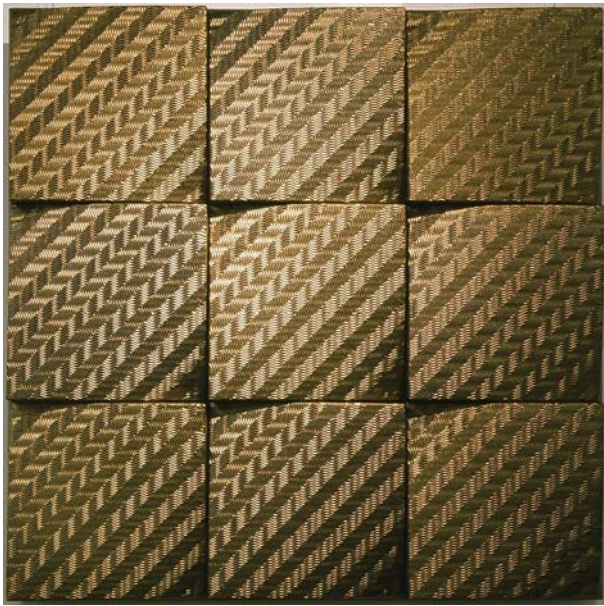
- ・ The cosmos 死の終焉 (w:1525×h:535×d:70mm)
- ・ The cosmos 生の創始 (w:1520×h:535×d:70mm)
- ・ The cosmos<dark side> (w:1590×h:920×d:70mm)
- ・ The cosmos<light side> (w:1585×h:920×d:70mm)
- ・ The cosmos<dark side> (small) (w:1070×h:652×d:70mm)
- ・ The cosmos<light side> (small) (w:1080×h:652×d:70mm)
- ・ The cosmos<dark side>(ss)a (w:560×h:325×d:70mm)
- ・ The cosmos<light side>(ss)a (w:560×h:330×d:70mm)
- ・ The cosmos<dark side>(ss)b (w:560×h:330×d:70mm) * 写真なし
- ・ The cosmos<light side>(ss)b (w:560×h:330×d:70mm) *写真なし
- ・ うつろいゆく暖かな陽光の色 (w:1300×h:340×d:85mm)
- ・ うつろいゆく涼やかな風の色 (w:1300×h:340×d:85mm)
- ・ 涼風の色 (w:570×h:650×d:85mm)
- ・ 陽光の色 (w:570×h:650×d:85mm)
- ・ 涼風の色 (small) (w:340×h:640×d:85mm)
- ・ 陽光の色 (small) (w:340×h:640×d:85mm)
- ・ The light caught on the surface・ The light reflected by the surface<表面が放つ光・表面が受ける光> (各w:約900×h:約900mm)

* 「個展」 2002. 11 (ギャラリー プント) 出品作品

by 「個展」 2002.11 (garelia punto)

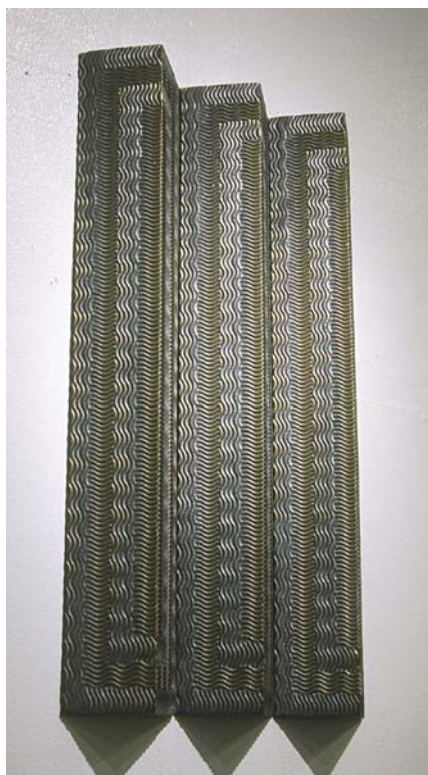


The light caught on the surface · The light reflected by the surface
表面が受ける光・表面が放つ光
各h:約900×w:900(mm)/ceramic 2002



部分拡大

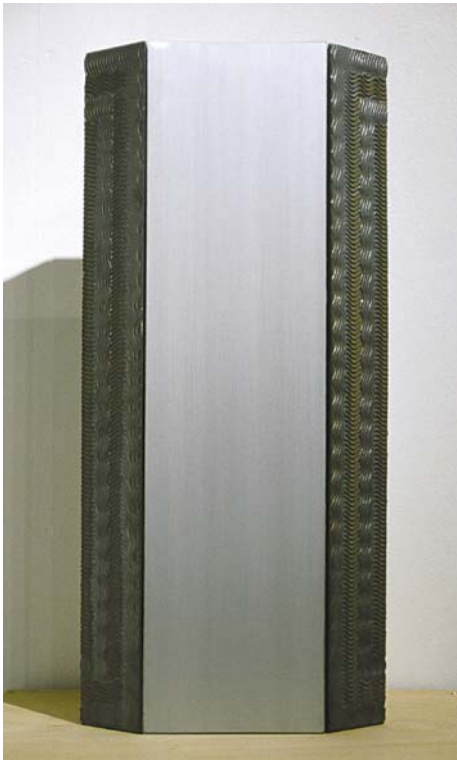




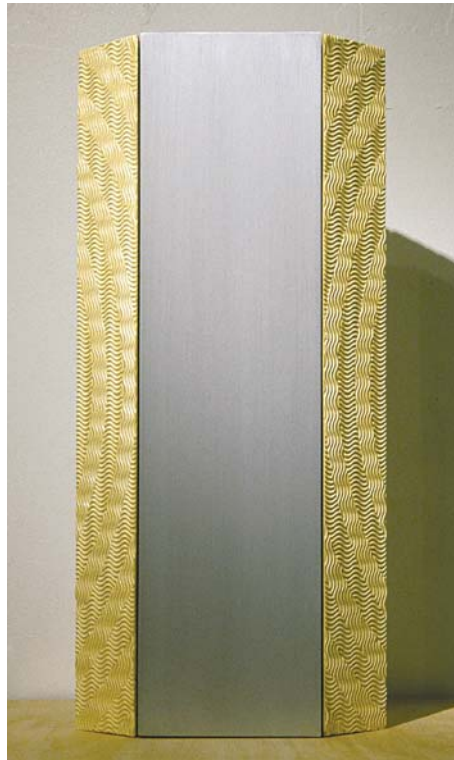
影の柱
w:330×h:580×d:55(mm)/ceramic
2002.11



光の柱
w:330×h:580×d:55(mm)/ceramic
2002.11



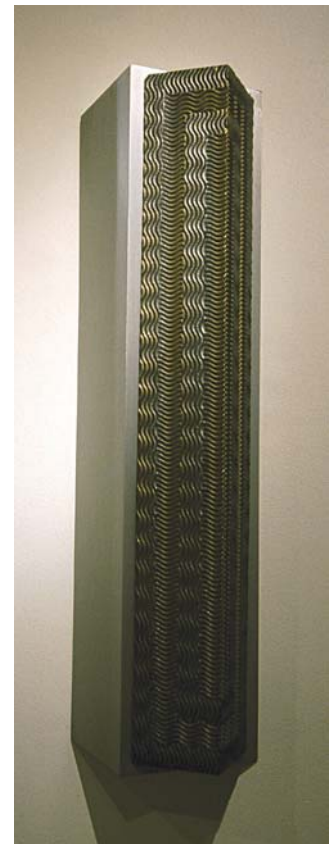
square pillar (shade)
w:265×h:582×d:108(mm)/ceramic.aluminum
2002.11



square pillar (light)
w:265×h:580×d:113(mm)/ceramic.aluminum
2002.11



triangular pillar (light)
w:185×h:600×d:93(mm)/ceramic.aluminum
2002.11

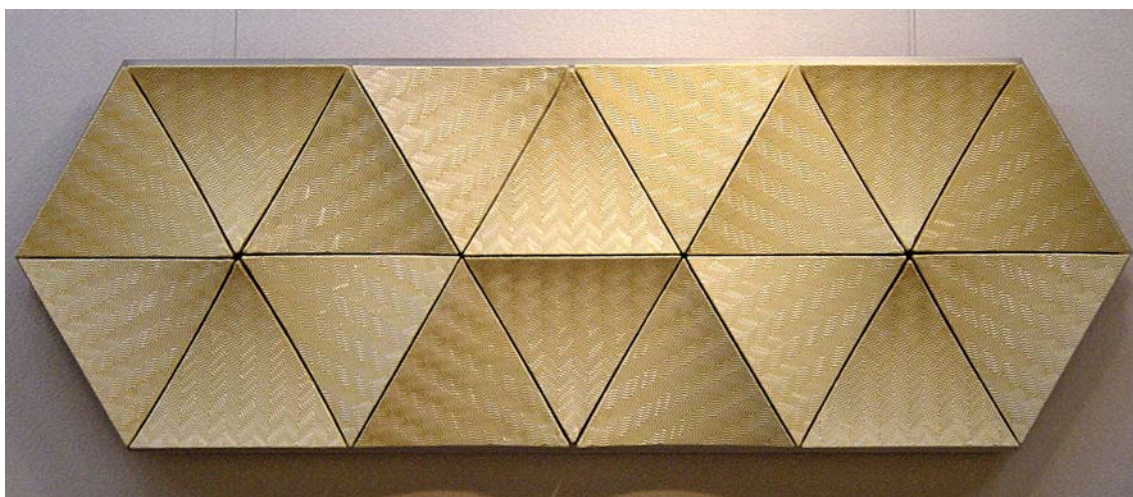


triangular pillar (shade)
w:185×h:600×d:93(mm)/ceramic.aluminum
2002.11

by 「一工芸からのアプローチ—現代造形7人展」 2003.8 (松坂屋南館 美術画廊)



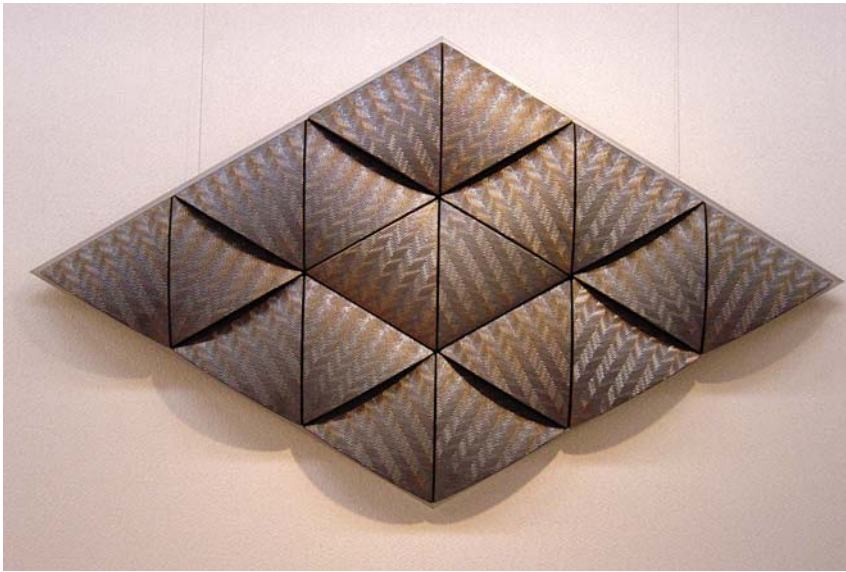
The cosmos 死の終焉 w:1525×h:535×d:70(mm)/ceramic 2003.8



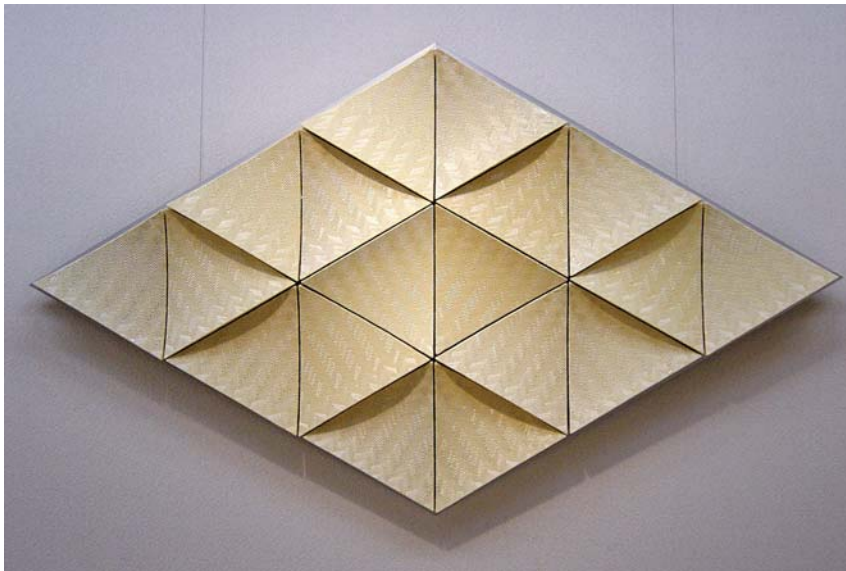
The cosmos 生の創始 w:1520×h:535×d:70(mm)/ceramic 2003.8



部分拡大

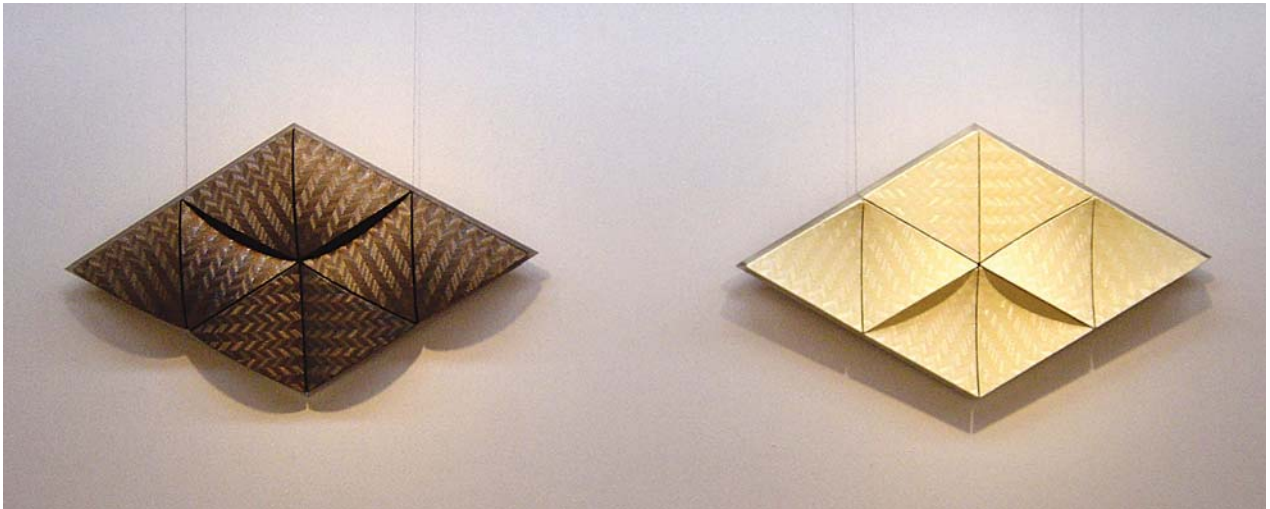


The cosmos (dark side)
w:1590xh:920xd:70(mm)/ceramic
2003.8



The cosmos (light side)
w:1585xh:920xd:70(mm)/ceramic
2003.8

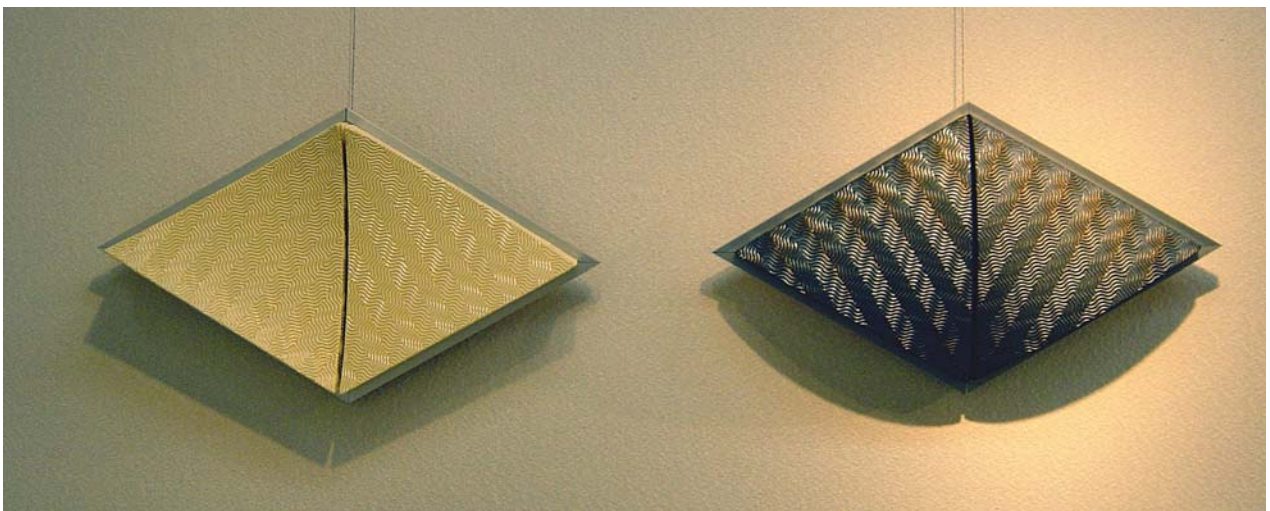




The cosmos <dark side> (small)
w:1070×h:625×d:70(mm)/ceramic
2003.8



The cosmos <light side> (small)
w:1080×h:652×d:70(mm)/ceramic
2003.8



The cosmos <light side> (ss)
w:560×h:330×d:70(mm)/ceramic
2003.8

The cosmos <dark side> (ss)
w:560×h:325×d:70(mm)/ceramic
2003.8



うつろいゆく暖かな陽光のいる w:1300xh:340xd:85(mm)/ceramic 2003.8



うつろいゆく涼やかな風のいる w:1300xh:340xd:85(mm)/ceramic 2003.8



作品の左方向から



作品の右方向から

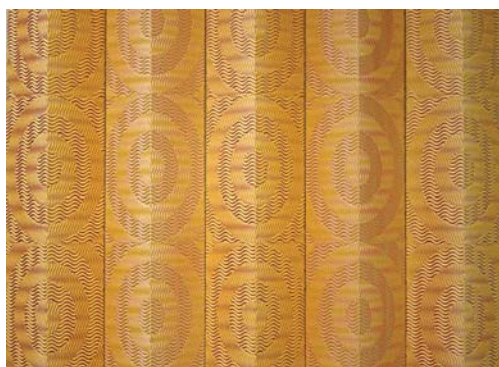
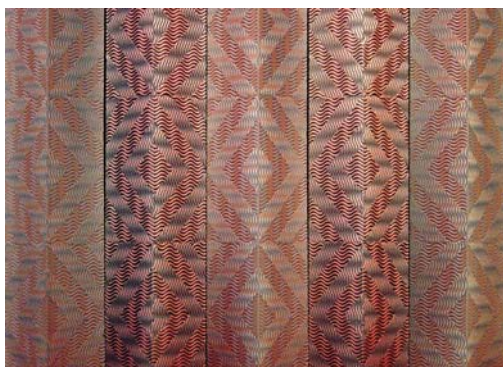




涼風のいる w:570×h:650×d:85(mm)/ceramic 2003.8



陽光のいる w:570×h:650×d:85(mm)/ceramic 2003.8



部分拡大



陽光のいる (small)
w:340×h:640×d:85(mm)/ceramic
2003.8

涼風のいる (small)
w:340×h:640×d:85(mm)/ceramic
2003.8